昭和43年度

編集委員のことば

このあゆみが
みなさんの
心の中に
いつまでも
残ることを
願いますか

編集委員長
河野孝幸

編集委員
飯野寿彦
千野勉
矢崎三明
鈴木智恵子
萩野恵美子
豊島昭子

大空　飯野寿彦

空

空は人間みたいだ
楽しい時には
からりとした
笑顔を見せ
悲しい時には
なみだの雨をふらす
また、おこった時には
雷をおこす
しかしなぜか空は
人間みたいに
争わない、
空は平和だ
おこったあとには
すぐ笑顔をみせる
そんな空が好きだ
ぼくは
そんな空になりたい
大きな大きな
そんな空に

宇宙　石川晋

はてしなく
広がる宇宙
どこまで行っても

暗黒の世界だ
ただ点々と光る
星だけが見える
その星も何億光年も
はなれているのだ
そのいくつかの星に
生物がすんでいる
かもしれない
広い宇宙だ
地球よりも
化学の進歩した星も
あるだろう
その反対に
原始生活をしている

星もあるだろう
この広い宇宙を
想像して見る
いろいろなことが
浮かんでくる
はてしなく
広がる宇宙
ぼくは
こんな宇宙が
好きだ

山　　上田幸

広い山
高い山
日焼けの山
朝日をあびて
深い山々
冬は雪でまっしろだ
でもまた
春が来　夏が来る
大きい山
小さい山
時には
大爆発する山もある
世界の人類は

こんな山々を
忘れることが
ないだろう
いだいな山々
早くも大きく
なったらこんな
人間になりたいと
思う

ぼくのつくえ

上野治

ぼくのつくえは
きずだらけ
いつ見ても
どこから見ても、
まっ黒に見える
けっして
いいつくえとは
いえない
しかし
ぼくは
このつくえが
大すきだ
つくえは、
きずだらけだけど
いつか、
このつくえは、
ぼくに
ゆめをあたえて
くれるだろう

鳥　河西錦弥

鳥は人間の
もっているものより
はるかに
すばらしい物を
持っている
つばさ　自由に
空をとべるつばさ
ぼくは鳥のように
空が飛びたい
つばさをひろげ
この広い空を
自由に飛びたい
空を飛んだら

どんなに
すばらしいだろう
どんなに気持ちが
いいことだろう
きっと新しく
よみがえったように
なるだろう
いちどでいい
ぼくは飛びたい
大空を鳥のように
飛びたい

石

北村敏

石が道におちていた
ひろって
手の上にのせた
こんな石でも
じっと見ると
石の形が変わってくる
遠くで見ると
丸いけど
近くでじっと
よく見れば
とがった所や
くぼんだ所が
見えてきた

この石はもとは
もっと大きかったのか
それとも大きさは
変わっていないかも
しれない
仲間も友だちも
いないのか
それはだれもしらない
ただぽつんと
道の上に
おちている

雲　小池浩

いやな雲
くもは　いやだ
雨を　ふらせる
その雨を　日曜日に
ふらせるのだ
だから　雲は　いやだ
心の中では、
いいくもと
いっているけれど
日曜日に　ふりせる
くもは、いやだ

人間としての条件　河野孝幸

人間として
生まれてきたからに
は
当然
人間としてのやくめ
人間としてのほこ
も
持たねばならない

人間として
生まれてきたからに
は―

当然
他人に害をあたえず
人間としての信用
を
持たねばならない
人間として
生まれてきたからに
は
当然
きたなくみにくい
社会の
どん底の中でも
正しく生きねば

ならない
人間として
生まれてきたからに
は
当然
しよくを持ち
苦労の影に
喜びを持たねば
ならない
人間として
ぼくたちは
ぼくたちの生活を

みずからの力で
きずきあげて、
いかねばならない

時計　、　小林昇

時計には
丸い時計もあれば
四角いのもある
いろいろな時計に
あわせて
色がぬってある

ボーン
ボーン

昔は
ねじで動かして

いたのだろうか
現在では
電地で動いている
腕時計の中には
自動のものもある
いったいだれが
こんな
複雑な機械を
発明したの
だろうか
いったいいつ発明
したのだろう

それは時計だけが

しっている
そしてまた
コチッコッチッ
と
動いている

詩

五味利久

詩
詩を書くのは
ぼくは、大きらいだ
この詩を
作るときも
かなりなやんだ

でも
なやんでついに
かいた
だから
国語の中でも
とくに詩は
大きらいだ
だから
ぼくも詩を
すきになって
詩をどんどん
読みたい

やぶけたくつ

斎藤春男

まっ黒で
かかとがやぶけた
くつ
何かたべたいように
大きな口を
あけている
買った時には、
ぴかぴかだったの
だろう、
でも
はげしい運動を
したり
雨に当ったりして —

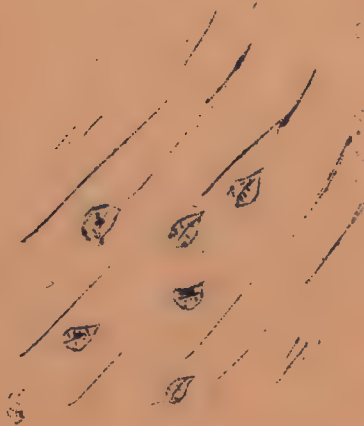
ぼろぼろになって
しまった。
きまってるし
プーンと
へんなにおいが
する。
でも今は、
しずかに
ねむっている
げた箱のすみで
しずかに
ねむっている

寒い朝　千野 [illegible]

朝起こされて
まだ寒いのに
学校へ行かねば
と思う
いやだなあ。

ぼくは、冬が
きらいだ
からだが
ぶるぶると
ふるえる
顔を、洗うのも
おっくうだ。

そして
朝飯を食べて
学校に向う。
一日の
勉業を終え
ほっとする
きょう一日の
寒が終った。

人間

津島遥男

この地球上に
何種の生き物が
生きのびて
いるのだろう
その中で
地球を支配する人間
人間がこの地球を
支配しているかぎり
この地球が
平和である
長い年月の間
争い助け合って

生きのびる人間
生きるために
生まれたのか
争うために
生きているのか
人間はすばらしい
地球を支配するように
なったのも
頭がよく考える力が
あるからだ
このことが動物に
まねができるか
ぼくは人間に
生まれてよかった

雪

時田雅彦

雪が降ると
気持ちがいい
見わたすかぎり
まっ白だ
遠くを見ると
まぶしく光る
雪を見ていると
美しく感じる
この雪がふまれて
とけていき
いつかは
あとかたもなくなる
だけども心の中には

美しさが
いつまでも
のこっているだろう

取文人

いく年も
いく日も
教室をきれいに
かざってくれた
この壁
今では
だれが見ても
どこから見ても
黒く
穴、まであいている
色々な人の
色々な思い出が

きずついている壁

でもぼくたちは
ここに
絶対
きずをつけないぞ
だからいつまでも
教室をきれいに
かざってくれ

太陽

野中和彦

太陽は燃えている
真赤に燃えている
ものすごく暑い
コロナを出して
燃えている

もし
太陽がなくなったら
地球は
全滅するだろう
太陽の
軌道からはずれても
たちまち
ちがう星に突入して
この世から
地球はなくなろう
月や他の星の
開発が進んでも
太陽の開発は
百年たっても
二百年たっても
開発は
そう進まないだろう

夜空

藤田寿人

星が輝く
一番のりはだれだ
火星か
すぐそばで
輝いてる
きょうの夜空は
とてもきれいだ
東の空で月が
かすみ光りしてる

星達が
パッチクリウインク
している

僕は
涙を流したい時
歯を
くいしばりたい時
星に
心を忘れてしまう

夕ぐれ
そして
日の出まで
星が主役だ
黒い夜空に
たくましく
輝いている星

星達は
群を持っている。
星達は
手をつないでいる。
僕は　そんな人に
なりたい。

画用紙　二木功

何でも書ける
画用紙
字だって　絵だって。
いっぱい書ける。

いつも白く
清潔な画用紙
だれにでも
限りなく使われ
愛されている。
そんな画用紙が
とても好きだ

ぼくは
いつも白く
清潔で　愛される
画用紙が
とてもうらやましい。

地球の最後

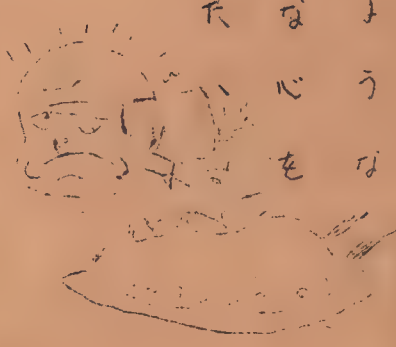
矢崎三明

この地球には　必ず
最後が来るに
ちがいない、
ぼくは　どんな
最後だろうか考える

まず
地球が
爆発してしまう
だが　ぼくは
考えたい
それは
化学が　進み

脱出できるだろう
ぼくは　そう
考えたい

そして地球は
水星と
衝突するだろう
だが　地球は
きどうを
変えていく力を持つ
それは　だれもが
考えることだろう

ぼくは　こう思う

それは
伝染病であると思う
コレラ・ガンなど
病原体など
抵抗力をつけ
核分別が　激しく
一つの物から
言語……とふえる
ことだろう
ぼくは　それが
一番こわい

すばらしい空

吉岡哲也

青く　美しい空
空は　広く無限に
続いている
空は　雄大である

空はすばらしい
力を持っている
何か気持ちの悪い時
何か心が
ゆがんでいる時など
空を見ると
すっきり、
はればれとする

空はいつ
どんな時でも
地上の人間を
見おろしている
かくれて
こそこそしていても
一目でわかる

ぼくが知っている
範囲では
空ほど
すばらしいものは
ないだろう
ぼくは

空のような
大きな心を
持ちたい

だれにも
わからない
青柳しずる

私達に必ず
おとずれる死
しかし　わからない
その死がいつ
私達の身を包むのか
どうしてだか

わからない
自分がどうして
この世の中に
生きているのか

だれにわかるかしら
自分は何を
すればいいのか

考えたことが
あるかしら
長い長い
私達の一生について
私達は

何をすれば
いいのだろう
何を頼りに生きて
いけばいいのだろう

いいえ
私達は
正しいことをすれば
いいのです
真心を信じて生きて
ゆけばいいのです、
真べをつくして
いけばいいのです
ねえそうでしょう

風　飯泉たか子

学校の帰り
強い風がふいてきた
風の中を
自転車で走る
風が
前から横から
おしてくる

風で
かみのもが
ばさばさになった
木が大きな音を
たてて　ゆれる

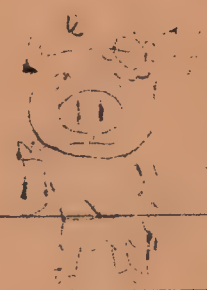
手がこちこちこちで
ちぎれそうになった

それでも
風はいっそう強く
ふいてくる、
砂やトタンを
飛ばす
疲れて歩きたく
なった
でも風に
負けたくない

私の願い　荻野恵美子

空にいっぱいある
星の一つが落ちて
わたしのポケットに
入ったら
雲に長い長い
はしごをかけて
その上を走るように
のぼります
雲の上に上がったら
下界を見おろして
貧しい家の子供に
星をなげてあげます
そうすればその子は

きっとしあわせに
なるでしょう
それから天使に
お願いして
やさしい心を
いっぱいもらいます
そして世界中の
意地悪な人の心と
とりかえます
それから雲の
かいだんをのぼって
花の世界に行き
きれいな花を
いっぱいもらって

世界中に
ばらまきます
そうして
世界中に平和と
しあわせを
ばらまくのです。

今が幸福（しあわせ）　荻野貴美香

幸福
自分自身で作るもの
私は不幸を知らない
今の生活
今の自分が
幸福だから—

でもこの幸福
いつまで続くことだろう
いつ不幸になることか
それは今の私には
想像できない
想像することよりも
今の幸福を守って
いかなくてはならない
私が生きているかぎり
不幸というものを
せおわれないように
いつまでも
いつまでも
守りつづけなければ
今の幸福—

「鏡」 小尾導一子

鏡のむこうに
もう一人の私がいる
かけがえのない
たった一人の
私が、もう一人 今
たしかににっと笑った
鏡のむこうた
私がいる
私が手を上げると
むこうの私が
手を上げる
鏡のむこうに
私がいる
私が左の目をつぶれば
むこうの私が
右の目をつぶる
鏡のむこうに
私がいる
私が首をかしげて
歯をむきだすと
むこうの私が
首をかしげて
歯をむき出す
鏡のむこうに
私がいる

アルバム　風間幸

私はアルバムを
めくった
アルバムをめくると
いろいろな思い出が
心の中を通りぬける
アルバムは…
なつかしい思い出
あの時の思い出
この時の思い出
思い出が
思い出を呼ぶ
アルバムの間に

はさんであった
たった一枚の写真
この写真にも
思い出がある
だいじにはっておこう

私のたいせつな
成長の足跡
いつまでもつづく足跡

冬の朝　小池小百合

朝早く
おもてに飛び出した
まだだれも通らない
うす暗い道

おもいきり
背伸びをした
なんともいえない
気持ちのよさ
白い息がすうっと
消えていった
冬の朝は寒いけれど
私はそのきびしい
はりつめた感じが
好きだ
つめたい空気が
じいんと胸にしみて
心が軽くなるようだ

学問の必要　小池〔illegible〕子

私は、勉強しているが
なんのために勉強するの
か
勉強なんて
しなくてもしても
同じ事じゃあないが
しかし　今の〔illegible〕世の中
に学問が必要だ、
日本は、〔illegible〕まだ
私達はきっと色々

な〔illegible〕学が
豊かな平和な国・〔illegible〕
作るまで
せいーぱい勉れし
よう

雨

小池三恵子

雨が降ると
教室のざわめきの中
がう
私ン人になってしま
いそうだ

白く
長いまっすぐに
どこから
降ってくるのか
地面に
たたきつける

テニスコートを見た
「あ」
またこんなに水が……
せっかく
作業したのに
こんなに雨が降って
バカ　バカ　バカと
どなりたくなる
くらいだ
雨よ降るなら
もっと降れ

ち　たに向かって

小堀すみ子

私が話しかけると
友はよくこいうだろう
うちあけるというだろう
意味、なんというだろう

友は しっかりしう」
というだけだ。
私を助けてはくれる
のが は恋へ
「そんなことぐらいで
くよくよするな」と
いうだけ
でも友は

こう言いたいだろう
「この世には
なやむこともある
だからといって
くじけてはいけない
自分でなやむだけ

なやめ

そしてあしたに
向かって立ちあがれ」
そう私はあしたに
向かって立ち上がら
なければ
ならないのだ

北風　斎藤亮子

空がつめたく
青くすんでいる
ピーンと、はりつめた
ような青さだ
きのうの曇り空が
うそのようだ
空のかたすみの雲が
南へ、ぐんぐん
動いていく
カキの小枝を
黒く大きくゆすって
屋根のかわらを
ガサガサと・ッ

ふるえさせて
また北風が
通りすぎた
学校へ急ぐ私の
かみのもを
ボサボサにして
ほほをたたきながら
ゆびさきを
かちかちにこおらせ
また北風が
通りすぎた

空

唐田登美子

どこまでも広く
かぎりなく
続いている空
青くすんでいる空
ところどころに
点々と
白い雲をうかべて
優雅で
神秘な感じがする空

こんな空を見てい
考ていると
自分の苦しみが

みえが　欲望が
ばからしく
なってくる
こんな苦しみなんか
まだまだ
この大空の中の
ちっちゃな
ちっちゃな
点でしかない
いえ
点にもならない
かもしれない
苦しみや悲しみを
うちあけても

空はいつも笑って
見むきも
してくれない

ああ・いいなあ空は
清く
青くすんでいて
どこまでも
はてしなく
続いていて
私もこの空のような
寛大な心を
持ちたいな。

暖冬異変

鈴木智恵子

ことしの冬
雪が
一つぶもふらない
一月から今まで
氷は
少ししかはらない
今年は
暖冬異変の年だ
七十五日ぶりの
暖冬異変だ
テレビでも新聞でも
この事を

[illegible]上 すてている

森閣の友達で 優 童

この自然を
この気候を
変えることはできない
しかし
二十一世紀の
世の中では
もしかしたら
変えることが
できるかもしれない

友達

豊島昭子

友達 友達 友達
三回言ってごらん
なにか感じない
いつもふつうに
口に出す言葉「友達」
それは私達にとって
一番大切な言葉
愛がある
やすらぎを感じる
そして
とってもだいじに
とっておきたい
ような言葉

からっぽの私の心を
まんたんにしてくれる
私は　この親しい
心からの友達を
もっていることを
とても幸福だと思う

私の道　名取理枝子

私の進む道
それはいったいどこへ
どこまで続くのだろう
私が生きているかぎり
はてしなく
どこまでも
どこまでも
私のあとから
いつまでも
いつまでも
ついてくる道
その道ばどんなに
くるしくまたつらく

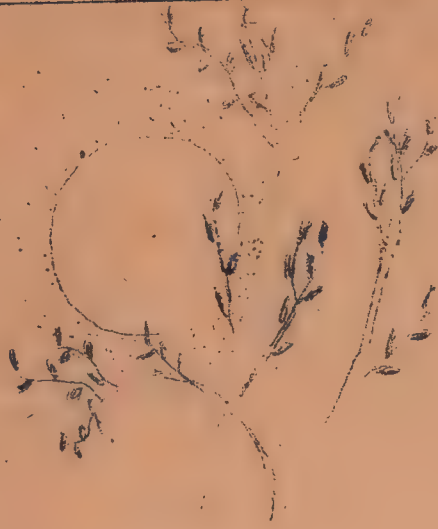
この道は私を
こうしてまで
苦しめるだろう
しかし私はそれに
たえていかなくては
この道に
勝たなくてはならない
道よ
私を苦しませるな
お前がいくら
いじめても
私はへこたれない
この道は
私の進む道だもの

野中和美

私の手は
生きている
おばあちゃんの手は
しわだらけ
米をそいだり
だいこんを洗ったり
休みなく
ジャブジャブ水の音
母も年寄りになれば
あんな手になるかしら
私はこれからだ
エンピツを持ったり

夕日　深沢靖美

一日が暮れてゆく
夕日が山にしずむ
一日のおわり
真赤に燃える夕日
それは消えゆく炎
夕日にむかって
私は思う
一日を有意義に
楽しくすごせたことを
夕日は言う
あしたも
がんばろうと

は
静かにしずんで行く
山々を照らしながら
いつの間にか
あたりは
暗くなっていた

美しい太陽　深沢幸

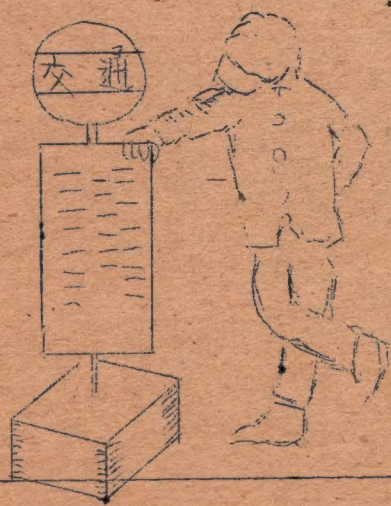
私は朝早くおきた
太陽は東の空に
のぼっていた
私は太陽にむかって
祈った
太陽は赤くもえている
太陽は私たちの
生きがいだ
太陽は赤く美しく
もえている
太陽は生きている
太陽はわたしに
向かって

きまり　保坂明江

道路を歩くにも
きまり
ごはんを食べるにも
きまり
部屋の中にいる時も
きまり
ああ　なぜこの世は
きまりだらけ
なのだろう
なぜきまりが
必要なのだ
ごはんだって
手づかみで食べれば

道路を
車がはしで
人間様がまん中を
歩りは
いいじゃあないか
部屋の中で
サ゛カーをすれば
いいじゃあないか
なぜだ!
だれもが
あたりまえだと
答えるだろう
私は
あたりまえぶって

いる人はきらいだ
むしろ
部屋の中で
大あばれする
人の方が好きだ

あゆみによせて　担任　荻野一郎

人間の、人生は、一歩、一歩、
努力し、努力して、
あゆむ　そのあしあとだ。
今年一年　君たちのあゆみは
どうだったか。
春の陸上競技大会優勝
秋の球技大会総合優勝
新聞コンクール学校二位
すばらしい。
しかし、生活はどうだろう
自分自身で反省してみる。
そこに進歩がある。
そうだ一分までがんばれ、あと一秒だ。
五十九秒の私たちです。

男性論　女性論

これは私たち女子が、大変おもしろがって、ぼくたちおたがいの、とくちょうをまとめてみたものです。男性論は女子が、女性論は男子が書きました。
気がるに読んで下さい

飯野寿秀
石川晋
上田幸
上野治
河西錦弥
北村敏
小池浩
河野孝幸
小林昇
五味利久
斉藤春男
千野勉
津島道男
時田雅彦
名取文人
野中和彦
藤田寿人

人の欠点ばかり言ってにくい人
もっと男らしくね
お目目が印象的ね
ちっこくてかわいいの
これからもまじめにね
あなたいつも何考えてるの？
あいきょうがあってステキ！
悪口はひかえめに
かよわい女性をいじめないで
植木さんに負けないようがんばってね
ハスキーな声がステキ
大きい子にいじめられないようにね
あんまりなやまないで
あら　あんたいたの？
ちっともわからなかったわ
協力性をもとう
もっとかんろくを出して
からだに気をつけてがんばってね

三木功
矢崎三明
吉岡哲也
青柳しず子
飯泉たか子
荻野恵美子
荻野貴美香
小尾導子
風間幸美
小池小百合
小池永子
小池三起江
小堀すみ子
斎藤範子
信田登美子
鈴木智恵子
豊島昭子
名取亜枝子
野中秋美
深沢靖美
深沢幸枝
保坂門江

朝遅刻をしないようにね
低音のみりょくかっこいい!
コント55号にまけないで
なんてったってうるさいのねえ
ほんと
金あつめがあっておかねのさい
そくうまいねえ
あんまり勉強するとからだにど
くですよ、
おこりっぽいのが玉にキズ
気が強く男っぽい
無口だよ家ではどう
いつもしおれて元気がないね
いつでもどこでもケンカの中心
仲間がいなくなるよ
GSにキャーキャーキャーな
いで
もっとおとなになれよ
まあたっしゃが何より
日かげのモヤシだよ。もっと
いせいよく
「努力をつづけて、ガンバレ
井の中のかわずだよもっとせら
しく
もっと健康なからだを、
何事も、おちついてゆっくり
とね
何ごとも熱心さがたりないねえ
まあよくたべること